

学び続ける。第 66 回 長崎大学長 河野茂の月曜通信

おはようございます。

長崎大学人、河野茂です。

いよいよ年度末も押し迫った 2 月 24 日、ロシアのウクライナ侵攻という信じられないようなニュースが飛び込んできて、コロナ関連のニュースさえ霞む事態となりました。

これまでも世界のどこかで絶えず紛争は起きていたものの、まさか、21 世紀になって大国と自他ともに認める国が、他国に対して軍事侵攻するとは予想もしていませんでした。

新型コロナウイルス感染症が世界的なパンデミックを起こした背景には、私たちの社会活動が地球の隅々まで行きわたっていたことがあります。

世界は密接につながり、お互いに依存しあって成立しているからこそ、こんなに短期間で世界に感染が広がったのです。

そのような時代に、どちらかが屈しない限り終わることができない戦争を始めても、そこに誰も得する者などいないことは明らかです。

戦争当事者となったロシアとウクライナはもちろん、世界中の人々が何らかの負の影響を受けてしまうのですから、このような行為は国際秩序を一気に不安定化する暴挙というよりほかはありません。

そのような状況に対し、抗議の意を示すべく、長崎大学では核兵器廃絶研究センターが、侵攻の翌日、2 月 25 日にいち早く声明を発表しました。

(<https://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/recna/topics/29942>)

「ロシアのウクライナ侵攻と核リスク」と題したそのレポートは、このような暴挙が、核兵器の使用や原子力施設の事故のリスクを大きく高めること、核軍縮、不拡散体制を揺るがすことを指摘し、早期の収束を呼び掛けました。

しかし、その後、このレポートの予測をそのまま地で行くかのように、ロシアは核戦力を念頭においた抑止力を特別警戒態勢に引き上げ、ますます核リスクが増す事態を招いています。

そこで、長崎大学は、異例のことですが再度、3 月 2 日に「ロシアのウクライナ侵攻と『核の恫喝』に対する抗議声明」

(<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/news/news3550.html>) を発表し、

これを英語、ロシア語、ウクライナ語で世界へも発信し、より強く鮮明に抗議の意を表明したのです。

そして、抗議ばかりでなく、ウクライナの学生たちに学びの場を提供するという支援も、現

在検討しています。

荒廃した国を再建するには、お金も必要ですが、専門知識を持った多くの人材も必要不可欠だからです。

そしてもうひとつの理由は学び続ける志を持った若者の存在そのものが国の未来を支える礎になるからです。

長崎大学は、原爆の惨禍を経験した大学です。

甚大な被害を受けた長崎の街の復興に学問は不可欠でした。

学び続けること、知の力を蓄えることの大切さと強さを長崎大学は過去の経験から知っています。

ですから、この戦争で学びの場を奪われたウクライナの学生に学び続ける場を提供できないかと考えたのです。

そして、そのためには皆さんの協力も必要です。

長崎大学には様々な国から学生が集まっています。

どこの国の出身であろうが制約を受けることなく学ぶことができるのが大学です。

出身国の違いによって不利益を被る学生が生じることがないように、強い関心と意識を持ってキャンパスの自由闊達な空気を守って欲しいと思います。

ウクライナ支援については、今後、詳細が決まり次第、教職員、学生の皆さんに情報共有していきます。